

造の鯨の表面に金の板を打ちつけてつくられた。築城当時に使われた金の量は、雌雄一対に慶長小判17975両分。慶長小判は1両約18グラム、金の含有量は約84%だったとされることから、純金量はおよそ270キロである。シャチホコの高さは約2.74メートルだったという。

しかし、現在の天守に輝いている金鯨は雄が約2.62メートル、雌が約2.57メートルで大きさこそさほど変わらないが、一対の金量は約88キロなのである。400年前と比べると、3分の1にまで瘦せているのだ。いったいどういうことなのだろうか？

実は、名古屋城の金鯨は、尾張藩が財政難になるたびに天守から降ろされては金を溶かされ、小判に変えられていた。そして戻される際には、純度を落とした金で铸直された。改铸は享保・文政・弘化年間に3度にわたって行われたが、金の代わりに銀を混ぜたため、最後には金鯨の輝きが鈍ってしまい、黒ずんで見えたという。これをごまか

すために尾張藩は「盗賊に盗まれないように」とか「鳥が巢を作らないように」などの理由をでっち上げ、金鯨を金網で覆って人々から見えないうようにしていた。

明治維新の廃藩置県で尾張藩が消滅し、名古屋城を廃城とすることになったと決まると、金鯨は宮内庁に献納される。しかし、のちに明治政府により廃城は撤回され、各地の展覧会を巡回していた金鯨も、明治12年（1879）に名古屋城に戻った。

その後、太平洋戦争時の空襲で名古屋城が炎上し、金鯨は溶け落ちてしまう。だが、戦後まもなく市民から再建を望む声が上がリ、昭和34年（1959）に鉄筋コンクリートで天守閣が再建された。そして、生まれ変わった天守閣の屋根には、大阪造幣局によって作り直された2代目の金鯨が再び輝いていたのだった。

#### 廃藩置県

1871年7月、明治政府は江戸幕府以来の藩を廃して府県に統一。版籍奉還後も旧藩主が知藩事となり、実質的に藩体制が続いていたのを改め、中央集権体制を強化する目的で実施された。全国261の藩を廃し、まず3府302県がまず置かれ、同年末までに3府72県となった。